

Ⅱ 調 査 の 経 過

1. 概 要

平城京羅城門跡は、古くから郡山城の東方の佐保川にかかる来生橋の付近にあるといわれてきた。

1935年、奈良県は佐保川の改修工事を行なったが、この際、来生橋付近で4個の礎石が出土した。これによって羅城門の所在位置が確められ、遺構の存在が実証された。しかし礎石の出土状況から門の大部分は佐保川の河川敷下にあることが予想され、発掘調査による遺構の検出は困難とおもわれた。その後、最近まで礎石の一部は川の水量の増減によって見え隠れしていた。

1961年、平城宮跡は西大寺周辺の急速に進む開発により、破壊の危機に直面していた。平城宮跡を守れという声が一斉におこり、全国的な保存運動が展開された。その間、関係者の努力で、遺跡の全額国費買い上げということで、ひとまず平城宮跡の保存はきまった。一方、これに関連して、識者の間や文化庁（当時、文化財保護委員会）では、平城京跡、なかでも南都七大寺旧境内の史跡指定をふくむ保存対策が検討されていた。文化庁はまず、南都七大寺（東大寺・西大寺・興福寺・薬師寺・元興寺・大安寺・法隆寺）の史跡指定の方針をたて、それを実施した。

またこの南都七大寺史跡指定の一環として、平城京羅城門跡と東・西両市跡の保存が識者や文化庁では問題にされていた。ところが、奈良市の都市計画にとまって羅城門跡付近は工場団地に予定され、南奈良区画整理事業団が実施にあたることになった。文化庁は奈良市の都市計画は平城京を復原的に残すような方法で実施するよう指導していた。この計画はその地域の古くからの地形を一変させるとともに、なかでも幹線道路九条線は、直接羅城門跡を横切る可能性があった。そうした中で、奈良市は平城京跡の保存を都市計画に組み入れ、羅城門跡を都市計画公園として、区画整理で用地を確保する保存計画を進めた。

1969年3月、文化庁は奈良市に、羅城門跡を含む、朱雀大路の史跡指定を正式に申し入れた。こうした動きをうけて、奈良市では平城京跡保存調査会（榎本亀次郎代表＜元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長＞）を発足させ、平城京の計画的な保存のための研究活動を実施した。

1969年7月、平城京跡保存調査会の調査研究活動の一環として、また羅城門の史跡公園化の具体的資料をうるため、奈良市は国庫補助をうけ、総額60万円（国30万、奈良市30万）の予算で発掘調査を実施した。発掘調査は奈良市教育委員会が主催し、榎本亀次郎を団長に、中村春寿（県立奈良高校教諭）・金関恕（天理大学助教授）・松下正司（奈良国立文化財研究所技官）が主となって行なった。発掘調査は羅城門跡東側の遺構を明らかにするため、佐保川東側の堤防下で実施した。ところが調査地一帯は佐保川のかつての氾濫で、地層がみだされ、顕著

な遺構は検出できなかった。

その後、比較的洪水の影響の少ないとみられる大和郡山市側の水田一帯の発掘調査を行えば、羅城門の遺構が把握できるのではないかという期待が、調査関係者の間にもたれるようになった。

1970年3月、郡山市は遺跡の発掘調査の持つ重要性から、ひきつづいて羅城門跡第二次の発掘調査を実施することになった。その間、郡山市では羅城門跡保存会（柳沢尚子会長）が結成され、調査実現への強い援助があった。発掘調査は国庫補助をうけ、総額120万円（国60万、郡山市60万）で、浅野清（大阪工業大学教授）を団長に、中村春寿・狩野久（奈良国立文化財研究所史料調査室長）・高島忠平（同技官）・弓場紀知（九州大学大学院生）が主となって実施した。調査地は佐保川堤防西側の水田である。羅城門の遺構の存在が考えられる佐保川堤防に接した金魚池は、金魚養殖の関係から、発掘が不可能となり、調査はその周辺の水田に限定された。発掘の結果、朱雀大路西側溝・九条大路北側溝・京の南端と濠と推定されている遺構の残存状況が予想以上にいいことがあきらかとなった。また、都市計画道路九条線が、羅城門跡を横切るとは確定的となり、金魚池の発掘は羅城門の正確な位置を知るうえで、早急に実現が望まれた。ところが、土地借り上げ・補償問題など、多くの困難があり、調査は引続き実施することができなかった。

羅城門跡保存会は、発掘の早期実現を関係当局にはたらきかけ、郡山市会では、平城京西市跡を含めて、羅城門跡の発掘保存が問題にされるなど、調査の機運が盛りあがった。また、文化庁は羅城門跡の指定に関連して再度係官を派遣し、その実施を協議した。

1972年2月、郡山市教委は235万の補正予算をくみ、土地の借り上げ、補償問題を解決し、奈良国立文化財研究所と共同で、羅城門跡の第三次発掘調査を実施することになった。

第三次発掘調査は、浅野清を団長に実施した。調査地は羅城門跡の存在するとみられる佐保川堤防に接した金魚池の南半に限定した。その結果、羅城門基壇をはじめ、朱雀大路西側溝延長部・暗渠を検出し、所期の目的を達することができた。

2. 調査関係者

第一次発掘調査

団長 榎本亀次郎（元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）

中村春寿（県立奈良高校教諭）・金関恕（天理大学助教授）・松下正司（奈良国立文化財研究所技官）
・川尻利一（奈良市経済部長）・片岡勉（同主幹） 協力者 南奈良区画整理事業団

第二次発掘調査

団長 浅野清（大阪工業大学教授）

中村春寿・狩野久（奈良国立文化財研究所室長）・高島忠平（同技官）・宮沢智士（同）・伊東太作（同）・森郁夫（同）・石松好雄（同）・黒崎直（同）・弓場紀知（九州大学院生）・小森信彦（大和

郡山市教育委員会)・木下平一(同)

協力者 田中安孝・西川繁久・堀部敏雄・宮本庄七・藤川政次郎・中田嘉四郎・谷野清治

第三次発掘調査

浅野清(団長)・中村春寿

奈良国立文化財研究所 坪井清足(平城宮跡発掘調査部長)・八賀晋(同室長)・細見啓三(同技官)・伊東太作(同)・横田拓実(同)・佃幹雄(同)・高島忠平(同)・菅原正明(同)・岡本東三(同)

大和郡山市教育委員会 堀川武史・植本繁寿・永原圭伸

協力者 米田三平・石田貞夫・森田義一・新藤勝

3. 調査日誌

第一次発掘調査 1965年7月28日～9月15日

7・28 鍬入式 A～Dトレンチ設定。午後Dトレンチ南半表土除去開始。

7・29 砂層下に泥土層あり。湧水激し。

7・30 Dトレンチ南半に東西方向の溝状遺構。溝底よりスラッグ検出。トレンチ北半表土除去。トレンチ東壁崩壊。砂層中に近世の土器出土。

8・2 Dトレンチ南半に粘土層上にうすい褐色土がのる基壇状の硬い面を検出。

8・3～4 Aトレンチ発掘開始。表土除去。Aトレンチ表土下約50～60cmで粘土層となる。Bトレンチ発掘開始。

8・6～7 Bトレンチ遺構検出。表土下約80cmで粘質砂土の硬い堆積面があり、その層中より近世の漆器碗が出土。

8・8 Cトレンチ表土除去。南端に新しい時期の井戸2基検出。

8・9 Bトレンチの砂層の上部粘土層上面に近世の建築遺構の一部を確認。砂層を1m以上掘り下げると、湧水激しく発掘不能。

8・10 Aトレンチの南半の畦畔を切断。表土下50cmで礫混りの褐色粘土層の硬い面がある。

8・11～14 各トレンチ遺構検出。いずれも礫・砂層が互層となり、川の氾濫による堆積とみられる。

8・15～17 作業休み。15日記念物課調査官平野邦雄、文化財専門委員井上光貞・関野克・大岡実・

浅野清の各氏来訪。

8・18～22 各トレンチ南地区清掃。写真撮影。実測。

8・23 雨天のため作業中止。

8・24 補足調査。

8・24～9・15 埋め戻し。調査終了。

第二次発掘調査 1970年3月9日～4月13日

3・9 鍬入式。用具搬入。現場小屋敷地の整地。発掘地区の設定。

3・10 Aトレンチ設定。発掘開始。表土下の暗褐色土中に中世の遺物を検出。

3・11 一部坪掘りを行ない、地表下1mに奈良時代の遺物の包含層を認めた。

3・12 トレンチ内南端に中世の南北溝を検出。溝中より漆器片出土。

3・13 トレンチ内外側で、南北溝2条、南側で東西溝を認めた。朱雀・九条大路の両側溝か。

3・14 両側溝の埋土を排土。瓦片多量。若干土器片を含む。

3・15 朱雀大路側溝下層の砂土から和同開珎・木簡各1点検出。九条大路側溝の南岸を追求。

3・16 雨天のため作業中止。

3・17 Aトレンチ(東西方向)南北畦畔下で黄褐色土築地遺構検出。その両側に瓦が堆積。九条大路北側溝から和同開珎一枚。

3・18 E地区南へトレンチ拡大。瓦の堆積は、屋根から転落したままのものと判明。九条大路北側溝底まで検出。

3・19 発掘作業なし。奈良市側にある第一次調

査の測量原点を移動。雪激し。

3・20 測量原点をコンクリートで固定。市道にBトレンチ設定。ただちに発掘開始。E地区トレンチを拡大。一面に瓦の堆積を認める。

3・21 Aトレンチ実測準備。一部発掘清掃。Bトレンチをさらに掘り下げる。土硬く作業困難。

3・22 朱雀大路西側築地は掘り込み地形と判明。実測準備。Bトレンチ内で予想した礎石わからず。午後、雨天のため作業中止。

3・23 AトレンチC地区で九条大路側溝に流れこむ2条の暗渠を検出。築地との関係から、東側の暗渠が新しい。Bトレンチを南の水田へ延長。西方の水田にDトレンチ設定。発掘。濠状の堆積土を認む。

3・24 Aトレンチ写真撮影。Bトレンチ床土下の砂層より灯明皿が出土。Dトレンチ南端でも濠状の堆積を認む。濠は南へのびるもよう。砂上より、奈良から平安の土器出土。Bトレンチ南側の道路にCトレンチ設定。

3・25 Aトレンチ実測。Bトレンチ青色粘土層に達す。Cトレンチに礎石の根石状のもの検出。新しい層上にある。古老の話では観音寺と野垣内の村境の石臼がすわっていた所だとのこと。Dトレンチ南方で試掘。

3・26 Aトレンチ実測。Bトレンチ南で濠状の堆積を確認。Cトレンチ内南側に砂層、Dトレンチ内でも同様の濠状堆積を認む。京の前面にかなり広い濠があるもよう。

3・27 Aトレンチ実測。Cトレンチを南へ拡張。Dトレンチを道路へのぼす。

3・28 Aトレンチ実測。Cトレンチ拡張部分で新しい東西溝を検出。Dトレンチをさらに掘り下げ硬い砂質の面を検出。

3・29 Aトレンチ平面実測完了。Cトレンチ内南側さらにさがるもよう。発掘困難。

3・30 Aトレンチ補足調査。Bトレンチ実測。Aトレンチ一部埋め戻し。

3・31 Aトレンチ土層実測。B・Cトレンチ実測。Aトレンチ埋め戻し。

4・1 B・Cトレンチ実測終了。Bトレンチ道路南肩下で青色粘土の地山が急にさがる部分を検

出。濠の北岸とみられる。

4・7～8 補足調査。埋め戻し。

4・9～12 埋め戻し。

4・13 埋め戻し終了。器材撤去。

第三次発掘調査 1972年2月1日～4月10日

2・1 鍬入式。表土除去開始。

2・2～14 排土作業

2・15 調査区東側地表下80cmで羅城門の基壇らしい黄褐色土からなる高まりを確認。

2・16～21 基壇から両側の黄褐色粘土層を排土。下は暗褐色土層。遺物は少ない。

2・22 調査区南西に硬い面があり、その土層から宋銭・明銭が出土。

2・23 さらに下層を排土。郡山城天守台石垣使用の旧礎石を調査。

2・24 基壇状の高まりの断面を観察。版築状の土層を確認。

2・24～27 排土作業。

2・29 奈良時代の遺構の検出を開始。朱雀大路西側溝（南北溝）の延長部を検出。溝中に玉石を検出。

3・1～3 南北溝中に瓦多し。玉石は暗渠か。南北溝の北側は大きく広がる。溝中より和同開珎・帯金具出土。

3・4 調査区東側で曲った溝を検出。南北溝中より人面土器出土。

3・6 東側の溝は北方調査区外へのびる。南北溝排土。

3・7 南北溝の西側5mのところ幅1mの溝を検出。掘り方からみて木樋暗渠のものか。清掃。

3・8 写真撮影。

3・11 現地説明会。

3・13 実測準備。

3・14～15 実測。

3・15 補足調査。埋め戻し開始。

3・16 基壇掘り込み地形を検出。埋め戻し。

3・17～22 補足調査。築地の寄柱と思われる掘り方検出。埋め戻し。

3・24～4・10 埋め戻し終了。